

2025

令和7年1月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻377号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

# とあそぼう



公益財団法人



公益財団法人  
さわやか福祉財団

さわやか福祉財団創設者・永世名誉パートナーの堀田力が

2024年11月24日に永眠いたしました

これまでの多大なるご支援に心より感謝申し上げます

その思いを受け継ぎ、新しいふれあい社会づくりを  
さらに進めてまいります

## 新春や 初志未だ成らず 富士仰ぐ

未だ先は長いぞ、しかしたゆまず挑戦するぞとの思いで  
富士を仰いでいる。たとえ自分は成し遂げられなくても、  
必ず仲間たちがやってくれるとの信頼感がある

(2010年 堀田力)



2025年

本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます

公益財団法人さわやか福祉財団

# とあるお

2025年1月号

## CONTENTS

- 2 **新しいふれあい社会 実現への道** **新春** 巻頭言

### 新しいふれあい社会づくりは私たちの原点

誰もが自分を生かして幸せに暮らせる社会を

清水 肇子

- 4 **広げよう つなげよう 地域助け合い** 活動の現場から

### みんなの思いをつなげて 喜びと安心が広がる地域へ

ささえ愛高野口 (和歌山県橋本市)

- 10 **いきいき わくわく** 子どもと一緒に地域で輝こう

### なんにも決めずに集まって 子どもと一緒にのんびりしよう

むらのし寄合所 (山梨県韮崎市)

- 18 **連載 共生社会** 一 認知症との新しい向き合い方 **9**

### 認知症の治療について考える

社会医療法人財団石心会理事長・川崎幸クリニック院長 杉山 孝博

- 20 **連載 人生100年** 地域とつながる施設とは **9**

### 「老いる」を支える ～認知症②～

公益財団法人Uビジョン研究所理事長 本間 郁子

#### 新しいふれあい社会づくりに向けて

14 「地域助け合い基金」  
助成先のご紹介／状況のご報告

24 ご支援ありがとうございます。  
さわやかパートナー (賛助会員)・  
ご寄付者の皆様のご紹介

25 活動日記 (抄)

②現場視察レポート

③投稿募集

④さわやかパートナーのご案内 / 表紙絵から

助け合いを広げよう / 新・ひとりごと・清水 肇子

# 新春

● 巻頭言 ●

新しいふれあい社会 実現への道 ●

## 新しいふれあい社会づくりは私たちの原点 誰もが自分を生かして幸せに暮らせる社会を

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

新しい年は、明るい希望に満ちた年になるだろうか。昨年のお正月に発生した能登半島地震の被災者の皆さんは、その後の大雨被害にも遭い、どれほど大変な一年を過ごしたことだろうか。一日でも早く復旧復興が進むようにと心から願うと共に、自然災害が多い日本では、どこも我が身の自分事として、支援も対策も考えていかなくてはならないと改めて思う。

阪神・淡路大震災発生から本年1月で丸30年、東日本大震災からは約14年の月日が経つ。地元の皆さんの大変なご苦労と努力で街並みは整備されてきたが、それでもなお課題を残す地域は多い。甚大な犠牲を払って学んだ教訓を、私たちはしっかりと生かしているだろうか。

一番の教訓は、人が人として心豊かに暮らすには、人同士のつながりが不可欠であるということ。そして行政サービスや専門職の対応、営利の事業だけではどれほど頑張っても日々生じている問題に対応しきれないということだ。社会課題の解決は身近な行動から進む。早い段階での住民同士のお互いさまの気づきやちょっとした支援は、事態の深刻化を防ぎ、当事者や支

援者の生きる活力を生み出す基にもなる。

誰一人取り残さない・取り残されない社会づくりは、国連が全世界に呼びかけて2030年が目標年度とされている。よく見聞きするようになったこの理念を単にスローガンで終わらせないためには、公的サービスと住民の主体的活動がしっかりとネットワークして展開されることが不可欠だ。どちらが優位かなどの議論は何とも不毛である。平時はどうしても目の前の形にとらわれがちだが、将来の有事に備えるためにも大切なものを見失わないようにしたい。

\*

\*

\*

さわやか福祉財団は創立以来、一貫して「新しいふれあい社会の構築」という理念を掲げ、その目標を達成すべく活動を続けている。新しいふれあい社会とは、それぞれの人が自分を大切にし、互いの個性やプライバシーを尊重しながら、ふれあい助け合う、そんないきいきとした社会であり、今目指す共生の社会づくりそのものである。

そして、この思いこそが当財団創設者である堀田力前会長の活動の原動力だった。数々の壁に立ち向かい、苦労を重ねることを厭わず、皆さんと一緒に笑顔で喜びを共有して多大なる功績を残された堀田さんは、老衰のため昨年11月24日にその生涯を閉じた。脳梗塞を発症して一線を退いた後も、変わらずにこれからの社会のありように関心を持ち続けていた。

その「新しいふれあい社会」はまだ実現しておらず、道半ばである。だから一人ひとりの幸せを追求する仕組みづくりという目標は変わらない。そのために住民・市民の活動の基盤充実は不可欠であり、時間がどれほどかかろうがその重要性和価値が低下することはない。

意欲的に試行し、やり方を柔軟に変えることも躊躇しないように。ただしその変化は果たして進化なのか、逆戻りではないのか？ 自問しつつ皆さんとさらにチャレンジする年としたい。



# みんなの思いをつなげて

## 喜びと安心が広がる地域へ

ささえ愛高野<sup>こうやくち</sup>口（和歌山県橋本市）

霊峰・高野山の玄関口、和歌山県橋本市高野口地区。「できることからやってみよう！」をモットーに、安心して暮らし続けられる地域をつくろうと、活動者も利用者も喜びを感じながら取り組んでいる「ささえ愛高野口」を取材しました。

（取材・文／境 朗子）

### 困り事↓できる事 自分も役に立ちたい

和歌山の北東端、大阪府に隣接し、高野山の参詣口として栄えてきた高野口地区。近年、他地域と同様に高齢化

の波が押し寄せていた。橋本市は20 つか、高野

15年から生活支援体制整備事業を開始し、地域の互助力を生かして住民全 口地区だ。

体で生活を支え合う体制づくりを推進。協議体での話し合いをきっかけに、「高齢になっても住み慣れた地域でお

市内の日常生活圏域を10地区に分けて

第2層協議体を設置してきたうちの1 住んでよかったと思えるような地域づ



ささえ愛高野口の活動拠点、高野口地区公民館



生活支援活動の様子  
(利用会員の庭の砂利敷き)

だろう?」

な困り事の一つだと気づかされた。

立ち上がった。17年12月、「ささえ愛高野口」(以下、ささえ愛)が誕生。

市内で体制整備事業から誕生した初めての団体となった。区長や老人クラブの人たち、民生委員など25人ほどがメンバーとなり、定期的に話し合いを重ねた。

ある日の集まりで、こんな意見が交わされた。「年を取ると増えてくる困り事って、地域の皆さんはどう解決しているのかな」「私が役に立てることがあるんじゃないかな」「そうだよね!」「でも実際、何に困っているの

そこで、人口40000人弱・高齢化率約38%の同地区の生活状況を把握すべく実施したのが、同地区に暮らす70歳以上の住民約1300人へのアンケート調査だ。同地区の第2層SCを務める久保勝さん(80歳)は19年、

「何かやりたいと思っている人が大勢いたことは本当にうれしかったですね。この辺りは昔から近所付き合いがあります。みんなで支え合える潜在力があるんだと、あらためて確信しました」とささえ愛の会長、廣岡慶三さん(77歳)は当時を振り返る。助けてもらえばかりでなく、自分もできることをしよう——。そんな双方向の考え方は、住民を元気にした。

ト in 大阪」に参加し意識調査の必要性を実感していた。得意のパソコンを駆使して、誰もがピンとくる分かりやすい質問表を作り配布した。その結果、800人の住民が回答。困り事の上位に挙げたのは、草刈りや庭の剪定など環境整備、布団干し、ごみ出し、買い物等。予想外だったのは、「自分が手助けできること」の間に困り事以上の回答数が寄せられたことだ。困り事と同じ内容以外に、「会話」や「交

「みんなで話し合いながら、半歩でも一歩でも前に進めていく。でも無理はしない。それぞれができることを楽しむ。それが継続につながると思えました」と廣岡さんは笑顔だ。

流」も挙げられた。ふれあいの消失は、ともすれば孤立を意味する。実は深刻

「みんなの思いと困っている人たちをつなげよう、できることからやってみよう!」。ささえ愛は、地区内の小さ

「何でもいつべんやってみなはれ」  
に後押しされて



月例で行われている移動支援部会の様子

なエリアでま  
ずごみ出し支  
援を始めてみ  
た。

そして、手

応えを感じた  
21年。いよいよ正式に助け  
合い活動がスタート。住民  
が「こんなこ  
と頼んでもい  
いのかな」と  
ためらってい  
たような困り  
事も寄せられ  
た。パケツに  
たまった雨水

になった。利用はチケット制で、30分  
400円（当初は200円）。「日本  
人の気質からすると、無償では気を遣  
ってなかなか頼みにくいですからね」  
と廣岡さん。

地域住民みんなが安心できて、気持  
ちが通じ合う生活支援を一步一步推し  
進めていったが、少し経つと「市民病  
院の無料送迎バスが廃止になって困っ  
ている」という切実な声が頻繁に届く  
ようになった。ささえ愛の出番を切望  
する人たちが目の前にいる。検討しな  
いわけにはいかない。

ということだった。

移動支援のノウハウは、関西S T S  
連絡会に相談し、先進地・三重県名張  
市を視察。地域とのつながりの中で、  
できる範囲で実施することなどを学ん  
だ。

「視察先の代表の『何でもいっぺんや  
つてみなはれ』という言葉に後押しさ  
れました。『その通りだ、1歩前に踏  
み出さなければ2歩目もないぞ』とあ  
らためて思いましたね」と廣岡さん。  
何件かの視察を通して、「移動支援や  
他の社会資源を包括的につなげられる  
ようなコーディネートが欲しいよ  
ね」といった意見も出るなど、活発な  
議論が繰り広げられていった。

同市社会福祉協議会所属の第1層S  
C・望月亮司さんは「ささえ愛の皆さ  
んは、主体的にどんどん前向きに進ま  
れます。我々は事務方として支援させ  
ていただいています。会議も盛り上  
がってすごく楽しいです」と語る。

が重くて捨てられない。仏壇用のろう  
そくライトが切れたので交換したい、  
等々。ささえ愛はさまざまな困り事を  
気軽に受け付ける相談窓口として評判

たまった雨水  
と分かり『よし、やろう！』という前  
向きな気持ちが高まったのです」と話  
すのは、ドライバーを担う一人、山本  
豊一さん（79歳）だ。市が車両の無料  
貸与や損害保険料等の費用を負担する

## 高齢者の不安を受け止め 移動支援開始

念のため和歌山運輸支局にも確認を取るなどして準備を進め、23年5月、ささえ愛の総会で移動支援の実施が決定。運営研修や会議を重ね、24年4月に運行を開始した。

活動日は、通院支援が月々土曜日の8〜17時。買い物支援は月・水・金曜日の8時30分〜17時。原則、市内の移動で片道の所要時間30分以内。利用者は事前に会員登録し、他の生活支援と同じチケット5枚綴りを購入。1回の利用で一律400円だ。ドライバーは8名が名乗りをあげ、車両は地区公民館の駐車場に置いている。寄せられる利用者のニーズと1台の車両の調整役、移動支援コーディネーターを担うのは井浦健之さん（71歳）だ。

「近所の人が息子さんの車で通院されていましたが、息子さんが仕事で遠く

へ引っ越し、

困っておられ

ました。何か

良い仕組みが

ないかなあと

常々考えてい

たので、移動

支援の活動を

知り、ぜひ実

現させたいと

思いました」

と参加の動機

を話す。活動が始まると、地域で不足

に困っていた高齢者たちから「待って

いました」とばかり依頼が殺到。「希

望される方の日時が重なった場合、い

かにスケジュールリングするか、悩まし

くもあります」

すると、ささえ愛を応援してきた市

健康福祉部地域包括支援センターの岸

部利美さんが、「井浦さんにご高齢者

のお話をいつでも丁寧にかけて、上



移動支援を利用している橋本さん（左）と  
ドライバーの山本さん（右）。移動用車両の傍で



チケットを  
受け渡して、  
いざ移動開始

手に調整されるので信頼が厚いんですよ」と話す。移動支援コーディネーターは、移動に不安を抱える高齢者の気持ちを受け止め、安心につなげる役目も担う大切な存在なのだ。「いずれ自分も利用者の立場になりますからね」と井浦さん。さらに、「移動支援のニーズは高まると思いますが、継続させるための課題の一つはドライバーの確保。活動者も歳を重ねていきますから、

若い人にもぜひ参加してもらいたい。今、チラシと併せて口コミで募集を頑張っているところですよ」

昨年4月から11月までのささえ愛による移動支援の利用件数は、約400件に至った。

## 喜び、やりがいい、いきがいてこそが 住民主体の生活支援

移動支援の現場へ案内してもらった。ちょうど高野口地区公民館の駐車場から軽自動車が発車するところだ。運行前に必ず行うエンジンやランプ等の点検も異常なし。車体の側面には「ささえ愛高野口移動支援」の文字。本日の支援ドライバーは前出の山本さんだ。利用会員が自宅近くで待つ場所に到着すると、さっそく降りて安全に乗り込むのをサポートする。

「こんにちは。お世話になります」と明るくあいさつするのは、橋本あき子さん（76歳）。行き先は県立紀北分院

だ。利用し始めたのは昨年6月からで、今や生活に不可欠な支援になっているという。「以前は自分で車を運転して遠くまで出かけていたのに、視力が低下して運転できなくなりました。不便だし、ストレスが溜まるし、悩んでいたら友人がこの支援を教えてください、一気に心が晴れやかになりました。車に乗せていただくとはっとしますね。公共の乗り物とは違う気遣いやあたたかさがありますから。女性ドライバーさんのときは、昔から付き合っているところ。近所さん同士で話しているような気分になります。通院が楽しくなりました」とうれしそうに話す。「私が手伝えそうなことですか？ 些細なことですが、以前からお一人暮らしの方のお話し相手をさせていただいていることくらいかしら」。すでにあるそんな活動も、お互いさまでつながって地域力となっていくだろう。

ほどなく目的地に到着。橋本さんの

乗降をサポートする山本さんは、「お役に立てるならうれしいです。私は他の生活支援もいろいろやってきましたが、移動支援を始めたら、高野口に住んでいながら知らない人や家、場所がまだまだあることが分かりました」と話す。

ささえ愛で唯一の女性ドライバー、坂本操さん（73歳）は、「車の中からお話しやすいのかもしれませんが。利用会員さんは、世間話だけでなくご家族のこと、これまでの人生のこと、いろいろなことを話してください。『体の調子が悪かったけど、お話をしたら元気が出ました。ありがとうございます』と喜んでくださる方もいます」とこやかに話す。

活動者に喜びをもたらす事例はほかにもある。自ら活動にも参加している前出の久保さんは、「難病の50代の方のごみ出しを引き受けました。生活上の相談にも乗るようになり、私も関わ



取材を受けてくださった皆さん。写真前列右から、井浦さん、坂本さん、廣岡さん、山本さん、前川さん、紙谷さん。後列右から、市地域振興室の上原慎太郎さん、望月さん、岸部さん、包括の水本梨々華さん、高野口地区公民館の安川友那さん、市社協の酒向時子さん



第2層SCで活動者でもある久保さん

ついている地元の体操教室をすすめました。通い始めるとその方がいろいろな面で意欲的になってきて、ごみ出しも少しずつですがご自分でもされるようになって、驚きました」

体制整備からずつと高野口地区を支援してきた当財団のさわやかインストラクター・紙谷伸子さんは、「当初はさまざま意見が飛び交っていましたが、廣岡会長をはじめとするとささえ愛の方々が包容力でまとめ上げてくれました。利用者者の立場に立った活動には本当に頭が下がりますし、これからは楽しみにしています」とうれしそうに語ってくれた。

高野口地区の住民で、ささえ愛協力会員の一人として事務局を担当する市職員の前川朋久さんは、「メンバーの皆さんが和気あいあい、元気いっぱい活動する姿を目にしながら私も一緒にやれるの

は本当に楽しい」と語る。

\* \* \*

生活支援は、寄せられた困り事を淡々と解決して終了するものではない。そこには必ず人と人とのふれあいがあり、住民の喜びとやりがいと地域に力と安心をもたらす。

### ささえ愛高野口

2017年、誰もがいつまでも元気に楽しく暮らせる地域づくりを目指し発足。協力会員26名、利用会員80名。暮らしのちょっとした困り事を住民同士で助け合う生活支援サービスを実施。30分400円のチケット制。ごみ出し、草取り、家の周りの環境整備、掃除、話し相手など。24年から開始した移動支援は登録制で、通院や買い物支援を実施。

●連絡先 090-3032-0336 (廣岡)  
090-4274-3478 (久保)

いいきき わくわく //

## 子どもと一緒に 地域で輝こう



# なんにも決めずに集まって 子どもと一緒にのんびりしよう

むらのし寄合所（山梨県韮崎市）

やることを決めずに、子どもも大人もみんなでのんびりしよう……。『ただ集まる』『子どもをみんなで見守る』『楽しくおしゃべりする』をキーワードに月1回開かれる異世代交流を取材しました。

（取材・文／石橋 千春）

### ● あえて企画せずに集まる

「むらのし」とは、甲州弁で「村の衆」という意味だそう。何ともほのぼのとした響き。2022年1月に立ち上げられた「むらのし寄合所」の会場は、韮崎市の北端にある下円井公民館。代表である内藤ひかりさん（35歳）の自宅からは目と鼻の先にある。午前10時前になると、内藤さんがキャリアカートをガラガラと引きながらやってくる。中には飲み物の入ったポットやコップ、子ども用の玩具や文具などがいっぱい。内藤さんが開錠している間に、公民館前の道を歩いてきた「ば

あば」や「じいじ」、お隣の南アルプス市から車でやってきたコアメンバーの太久保ゆうさん（35歳）親子、そしてひかりさんの子ども2人も走ってきた。

「おはよう!」「元気にしてた?」。三々五々集まっ

てきたむらのしたちは、元気にあいさつを交わしながらストーブをつけたり、窓のシャッターを開けたり。テーブルには、飲み物、おやつ、柿やふかし芋が並べられ、子ども用のローテーブルには



寄合所には  
普段から小さな子と  
親が集まる



おやつは  
みんなの持ち寄り

クレヨンと白い模造紙が広げられて、自由にお絵描きできる紙のキャンバスも準備万端。

玩具を並べるお手伝いをしてきた子どもたちが、キャツキャツと声を上げて追いかけてこを始める。一気にまわりが明るくにぎやかになった。子どもたちをやさしく目で追いながら談笑するのは、ひかりさんの義父・内藤正仁さん（73歳）と、その従兄の内藤駒勇さん（83歳）・要子さん（78歳）夫妻だ。

「子どもの力って本当に大きいね。いるだけで違う」と正仁さん。駒勇さんも「自宅にいとこボーッとテレビを見ているだけでしょ。でも、ここで子どもに目配りしていると楽しいしシャキッとするね」と笑う。さらに「よその孫でも懐いて膝に乗ってくる。それがとても自然なんだ」とも。子ども、若い人、高齢者がいてこそ自然な風景なのだ、じいじ2人は思う。親と子だけの関係性は窮屈、そこに高齢者やいろんな人が加われば心地良いクツションになると話す。

あらためてひかりさんに、あえて企画のない集まりにした理由を聞いた。

「子どもと出かけるとき、母親はその前に掃除や洗濯などやるのがいっぱいあります。出かけるのは楽しいけれど、帰ってくるですごく疲れてしまう。だから、何も企画しない集まりにしよう。ゆっくりするのもいいし、洗濯物を持ってきて置んでもいい」。3年経った今、「何もしない集まりが、いかに心の安らぎや余裕を生み出してくれたか。当初考えていた以上の手応えを感じています」

## ● ママのボヤキから生まれた活動

ひかりさんがこの活動を思い立ったのは21年。コロナの感染拡大により社会がすっかり変わってしまった

時期だった。高齢者は孫と会えず、子育て中の親も孤立していた頃、後にこの活動を共に立ち上げることになる友人、大久保さんからSNSで「ボヤキ」が届いた。「一日中、家の中で子どもにつきっきり。自由がほしい!」。大久保さんは2児の母で、ひかりさんもそのとき1歳の子どもがい



かご作りが得意な玉崎三男さん（75歳・右）と、かご作りに挑戦中の岩下さん（左）



たき火会ではマッチで火をつけて羽釜で炊飯。「火を使うイベントだと男性が張り切って参加してくれます」とひかりさん

た。それなら、高齢者と子育て中の親が抱えるそれぞれの課題をかけ合わせればうまくいくのではないか。ひかりさんは大久保さんに「不自由ならまわりの人を頼る、そんな昔ながらの場があったらいいなと思っています。一緒に作りませんか」と誘った。大久保さんも「やりましょう」と応え、2人で企画書を完成させた。

ひかりさんは、さっそくその企画書を荏崎市子育て支援センターの指定管理者「NPO法人子育て支援センターちびっこはうす なら★ちび」(以下、なら★ちび)に持参し、内藤香織理事長に相談した。当時、なら★ちびでは子どもと親の2世代交流のみで、3世代交流活動はまだ始まっていなかった。そこで、内藤理事長から「ぜひやってほしい。後押しするから」と励まされたそう。幸運なことに、理事長自身の空き家をリフォーム

した「龍岡の家」を開催場所として無料で使わせてもらえることにもなった。

## ● 大人の望みもかなえたい 小さな集まりだからこそ

龍岡の家では、ひかりさんや大久保さん、母子保健地域組織「愛育会」の活動に長年参加してきたひかりさんの実母・岩下琴美さん(67歳)、声をかけた若い親子2組ほどのごく小さな集まりで活動をスタート。仲

間に声をかけたりSNSで発信したり、なら★ちびでも広報してもらったりした。感染対策を行いながらではあるが、顔の見える近い関係だからこそ、安心して集まることができた。参加費は無料、子どもと自分の飲み物や玩具などは持参、10〜13時の開催時間内であればいつ来てもいい。「無理をせず集まる」というコンセプトが功を奏し、小さな集まりは次第にその根を下ろしていった。

親世代からは「祖父母世代がいて安心感がある」「第2の実家みたい」「先輩ママと育児のこ



独身女性からミルクをもらう赤ちゃんと、それを興味津々にのぞき込む隣の市から参加した子どもたち

とを話せる」、祖母世代からは「久しぶりに子どものにぎやかな声が聞けた」などうれしい声が上がった。市外からも人が集まるようになり、最近では移住してきた人が地域の情報を得たいと訪ねてくることも。しばらくして自分たちの活動スタイルが定着してきたことから、むらのし寄合所は龍岡の家を卒業して現在の公民館に移った。

回を重ねると意外なことに、参加者の中から「やりたいこと」がいろいろ出てきた。ママからは「シミがついて着られなくなったベビー服をリメイクできないかな」、農家のじいじからは「地域のブランド米『武川米農林48号』の味を子ども世代に伝えたい」、趣味のかが作りでワークショップを開き、わいわい集まりたい」等々。そうした大人の思いも実現したいと、年一回ほどイベントも開催するようになった。にら★ちびの会場を借りて、「サステイナブルなクリスマスマズリース講座」（ベビー服のリメイク）や、「ハロウィーンのかご作りワークショップ」、また「たき火会」では農林48号をみんなで炊いて賞味した。

大久保さんは「小さなコミュニティだからこそ、

大きな集まりでは拾えない小さな声やニーズの受け皿になることができると、この集まりの可能性を感じている。ひかりさんは夫と農業に従事する一方で、昨年

年荳崎市で開催された「地域支えあいフォーラム」を機に市社会福祉協議会や生活支援コーナーディネーターとも情報交換できるようになった。「ここに寄り合う人は、地元の人でも他の地域の人でもみんなが『むらのし』。ここから異世代交流を進めて、困り事がある人や地域で何かやりたいと思っている人のために、いろいろなコミュニティと連携したり橋渡しをしていきたい」と夢を語ってくれた。



取材日に集まった皆さん。左奥がひかりさん、右奥が岩下さん、右から2人目が大久保さん

# 応援ありがとうございます！

## 「地域助け合い基金」 助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、さまざまな世代・人々が参加する地域共生社会実現のための活動を支援している「地域助け合い基金」。今月号は、朝食支援、子ども食堂、みんなの居場所を紹介します。

なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに随時アップしていますので、思いが詰まった多彩な活動をぜひご覧ください。

千葉県千葉市

### 子どもの欠食・孤食対策

### 「朝活図書館」とあわせて朝食提供

NPO法人地域の医療を明るくする会

助成金額 14万2000円

「地域の医療を明るくする会」は、千葉県四街道市の地域住民の健康意識向上と子どもたちの健康問題に取り組んでいます。近年、社会問題化している子どもたちの朝食欠食

や孤食への対策として、子どもたちの夏休みの宿題を支援する市立図書館での「朝活図書館」開催日に合わせ、図書館近くの施設で希望する子に朝食を提供しました。

今回の助成金は、お米などの食料品や調理器具等備品の購入、有償ボランティアや場所提供への謝金などに活用されました。

実施には四街道市をはじめ、地元の医薬品総合商社と千葉大学予防医学センターによる「健康まちづくり共同研究部門」と連携することで企業や大学院生の協力が得られたほか、子ども食堂等を開催している団体「日替わりcaf

「eりんごの樹」から場所の提供とお手伝いの協力がありました。さらに、図書館長からの声かけで4名の高齢者がボランティアとして参加。開催4日間で200名以上の子どもやその家族が参加しました。大人の参加者からは「新学期に向けてリズムをつかむことができました」、子どもの参加者からは「夏休みおきるのがおそかったけど早起きできました」「友達と楽しく朝ごはんを食べました」など良好な感想が多数寄せられたとのこと。今後は長期休暇中の日中開催等も検討し、子どもの健康課題解決、高齢者の健康寿命延伸につなげていきたいと考えているそうです。



子どもたちへの朝食提供で調理する皆さん



おいしいご飯、みんなでいただきます！

「NPO法人WakuWakuの家」は、子どもたちがやってみたい・挑戦してみたいことに思いきり向き合える場をつくり、地域がよりあたたかい社会になっていくことを目指して、フリースクール、民間学童、子ども食堂、長期休みの子どものお預かり、自然体験学習イベントを行っています。子どもたちにみんなで食べる楽しさを味わってほしいとの思いから、2023年9月から、24年3月まで子ども食堂を11回開催し、合計440名

山梨県山梨市

みんなが役割を担う子ども食堂で  
信頼関係をつくり相談できる場所へ

NPO法人WakuWakuの家

助成金額 15万円



が参加しました。

近年の物価高騰などで低価格での食事提供が難しくなっていることから、今回の助成金は子ども食堂の食材購入に活用。回ごとに釜と焚火で炊いたご飯、パスタバイキングや手作りゼリー、巨大ケーキなどの子どもたちが喜ぶメニューとともに、近隣からの寄付による野菜や肉などを使用してバランスの良いメニューも提供できたそうです。

お腹いっぱいご飯を食べてゆったりと話をしたり、子どもたちの様子を互いに見守り合ったりして過ごし、盛り付けや片付けを参加者にも手伝ってもらったことで自然と良い居場所として機能するようになったという子ども食堂。信頼関係を少しずつ強くしていく中で、学校、子育て、家庭のことなどを相談されることも増え、必要に応じて別の機会に相談の時間を設けたり専門機関につなげることもできたということです。



お茶を飲みながら、みんなで集まりふれあう五郷おるで

## 香川県観音寺市 ここに来れば人に会える、話ができる 地元住民に何ができるか考える場所

ふれあいの場・五郷おるで

助成金額 15万円

第2層協議体「おいでよ大野原」で日頃から情報を共有し、SCとも連携しながら、身近なところで居場所づくりを広めようと取り組んでいる観音寺市大野原地区。地元の小学校が他地区に統合され、JAの支店も廃止になったことなどから危機感を持ち、地域住民対象のアンケートや関係団体との意見交換を行い、3年という期間をかけてJAの支店跡を借り受けることになりました。

今回の助成金は、湯沸かしポットや掃除機、食器乾燥機、ペタンクボール、居場所の看板等の購入に活用されました。

「五郷おるで」と名付けられたその居場所は、1階の元事務所でも誰でも交流できるほか、2階

## 「地域助け合い基金」 状況のご報告

能登半島地震から1年。地域助け合い基金は、引き続き被災地・被災者支援も実行してまいります。皆様のさらなるご支援・ご寄付をよろしくお願い申し上げます。

(12月15日) 当財団ホームページ開示時点

### ◎寄付受付額

248件 1億9434万337円

このうち当財団より1億6162万1000円を供出

### ◎助成実行額

1213件 1億8655万8965円

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。



クレジットカード  
決済ページ



財団ホームページ内  
基金関連ページ

●基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、上のコードもご利用ください

### 基金に関するご意見・お問合せ

地域助け合い基金  
担当

電話：(03) 5470-7751

FAX：(03) 5470-7755

メール：tasukeai-kikin@sawayakazaidan.or.jp

の和室では読み聞かせ、屋外はペタンク同好会の協力による練習場にするなど月3回開催。ハーモニカ演奏会やしめ縄作り等のイベントなども行いながら、実情に合った方向性を見つけ、「継続第一」で活動していくとのことでした。開所式には、佐伯明浩市長、第2層協議体関係者、第1層SC宮武千恵子氏、香川県農協などのほか、地域の人の

ちも60名ほどが参加しました。「地元で暮らしている人が元気で暮らしていくために今、何ができるか」「人と人が会って話をして、意見を述べてこそ意味がある。その場所が『五郷おるで』だと思います」と力強い報告をいただきました。

## ―認知症との 新しい向き合い方

社会医療法人財団石心会理事長  
川崎幸クリニック院長

杉山 孝博



(すぎやま たかひろ)

1973年東京大学医学部卒。1998年9月川崎幸クリニックス院長に、2023年7月社会医療法人財団石心会理事長に就任。1981年から公益社団法人認知症の人と家族の会の活動に参加。全国本部の副代表理事(副代表)。公益社団法人日本認知症グループホーム協会顧問、公益財団法人さわやか福祉財団評議員。著書は、杉山孝博著「マンガでわかる 認知症の9大法則と1原則」(法研)、杉山孝博監修「認知症の人の不可解な行動がわかる本」(講談社)など多数。

## 認知症の治療について考える

認知症は認知機能の低下を特徴とする症候群で、

症状を引き起こす原因として脳萎縮が原因であるアルツハイマー型認知症を始めとしてたくさんの方をあげることができます。正常圧水頭症・慢性硬膜下血種・脳腫瘍・甲状腺機能低下症などは適切に診断・治療できれば治ることがありますが、大部分の疾患では確実な予防法や治療法はありません。

しかし、多くの認知症の人が医療機関で診断や治療を受けており、音楽療法や回想法などが介護現場で行われています。どのような意味があるのでしょ

うか。

アルツハイマー型認知症に対しては、ドネペジル塩酸塩、ガランタミン臭化水素酸塩、リバスチグミン、メマンチン塩酸塩が使われていますが、神経と神経のつながりを改善したり、神経細胞の崩壊を抑えることによって、認知症の症状が悪化するのを抑えるもので、疾患を治すものではありません。

2023年12月20日から使用が開始されたレカネマブ(商品名レケンビ)はアルツハイマー型認知症の原因のひとつであるアミロイド・ベータ凝集体に



対するモノクローナル抗体で、2週間に1回静脈注射することにより脳内のアミロイド・ベータの蓄積を減らす効果が確認されています。治療対象者は軽度認知障害や初期のアルツハイマー型認知症で、各種の検査でアミロイド・ベータの蓄積が証明された患者とされていて、現在治療中の患者は対象になりません。悪化抑制効果が27%程度であり高くないこと、脳浮腫・微小出血が1/2割にみられること、年間約300万円の薬剤費がかかること、検査のときの高機能医療機関でないと治療が受けられないことなどの問題はありますが、「進行を遅らせる」から「治療ができる」という心理効果は大きいと思います。

その他の薬物療法としては、抗精神病薬、抗不安薬、睡眠薬、抗うつ薬、抗てんかん薬、漢方薬などがあります。妄想・興奮・暴言・暴力・不安・不眠・抑うつなど、様々な行動・心理症状（BPSD）に対して処方されることがあります。BPSDは、認知症の人の苦痛、不安だけでなく、介護者の介護

負担を増し、介護拒否や時に虐待をもたらすことがあるからです。

しかし、高齢者の場合、副作用が出やすいので少量から服用を開始し、症状を完全に抑えることを目標とするのではなく、介護者が対応できる程度に軽減することを目標とするのが原則です。また、期待される効果が得られなかったり、副作用が出てきた場合にはその薬剤を中止するか、他の薬剤への変更を検討することも必要です。主な副作用としては、ふらつき・転倒、食欲低下、嚥下障害、小刻み歩行や手足の震え等のパーキンソン症状、失禁・排尿困難・尿閉・便秘などの直腸膀胱障害、興奮・幻覚・妄想、高熱・意識障害などがあります。

非薬物療法としては、脳の機能を刺激する認知リハビリテーション、過去の思い出を語ることで、記憶を刺激して感情の安定を図る回想法、音楽や芸術を楽しむ音楽療法・芸術療法、動物とのふれあいを通じて感情の安定をめざすアニマルセラピーなどが試みられています。

（次号に続く）

## 「老いる」を支える

### 「認知症②」

公益財団法人Uビジョン 研究所理事長 本間 郁子

自治体からの依頼で、身寄りが無いという女性を特養ホームで受け入れました。近所の方から、夜中も歩き回っているとの情報が自治体に寄せられたことがきっかけでした。

受け入れることは社会的な義務ですが、一人暮らしで、地域の小さな会社で働いていたということ以外、その方の情報はほとんどありませんでした。

寡黙でほとんど話しませんし、「食事ですよ」「お風呂の時間ですよ」と声をかけると「うん」と頷く



(ほんま いくこ)

図書館情報大学卒業（現筑波大学）。さわやか福祉財団評議員、学校法人光塩学園評議員。利用者の人権を守るための高齢者生活施設の認証・評価事業を創設。全国の介護施設や市民向けセミナー講師を務める。ハ表彰V2005年国際ソロプチミスト東京受賞、2010年エイボン女性大賞受賞。ハ著書V多数。近著『この一冊でわかる特別養護老人ホームを選ぶチェックポイント』（30ページ）。お申し込みは、AmazonかUビジョン研究所（電話03・6904・4611）へ

だけでした。ただ、唯一職員に尋ねることがありました。それは「今日は何日?」、それも1日に2回くらい。職員が「〇〇日ですよ」というと、だまっで行ってしまいます。それに、その方の生活リズムは2日間ほとんど寝ずに歩き続け、その後の2日間ほとんど寝ているという状態が入居してから続いており、徘徊は認知症だからなのか?と、わからないまま戸惑うばかりでした。ベッドの場所や位置を変えてみたり、脱水にならないように水を飲んでも

らおうと、「○○さん、お茶ですよ。少し休みませ  
んか？」と声をかけても、まったくダメでした。た  
だ、スタップ室に入って来て、テーブルの上にお茶  
の入ったコップを見つけると飲んだりしていました。  
食事の時は数分間だけ座っていますが、すぐに立ち  
上がって歩き始めるため、彼女が立ち寄る場所に小  
さいおにぎりを置いて工夫していました。

そんな日が続くある日、窓ガラスに叩きつけるよ  
うな雨音が聞こえる午後、彼女が食堂の窓から竹林  
を見ていました。その姿に気づいた女性施設長は何  
も言わずに並んで竹林を見ていました。すると、そ  
の方がちらっと2回ほど施設長の方に顔を向けたあ  
と「息子が死んだ」とポツリと言いました。胸の内  
はドキツとしながらも施設長は冷静に「そお。息  
子さん亡くなったのね」と言いました。「うん」と  
うなずいた後、少し顔が和らいだように見えたと言  
います。

その後、職員がその方の勤めていたという会社を  
訪ねました。その方を知っている人はいませんでし

たが、前にこの会社に勤めていたという人を知って  
いるという人がいて、お話を聞く機会をつくってく  
れました。そうしたら、息子は20歳くらいの時に脳  
炎で亡くなっていたことがわかりました。息子の亡  
きあとは笑顔がなく無表情で、毎月の命日には欠か  
さずお墓参りに行っていたというのです。

今日は何日？と尋ね、歩き続けるのはお墓参りな  
のではないかと推測しました。職員はその時から  
「徘徊」という言葉を使うのをやめました。癒えな  
い悲しみや辛さを負いながら歩いている。勝手に徘徊  
という偏見を持つてはいけないと思ったそうです。  
その後、体調を崩しベッドに寝ついた時に施設長  
が、「息子さんは、あなたがお母さんで良かったと  
思っていますよ」と声をかけると、閉じていた目か  
ら涙が流れていたそうです。

この方のように一人暮らしであっても、地域の人の  
誰かと少しでもつながっていれば、  
私たちはその人の思いを大切にでき  
る支援ができるのです。



## 八木山地区社協へ、 尾張旭市から視察訪問

昨年11月13日、岐阜県各務原市の八木山地区社会福祉協議会において現場視察が行われました。

訪れたのは、愛知県の尾張旭市社協と同市内の活動者の計28名。この視察は、昨年7月号の本誌「広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から」のコーナーに八木山地区社協の取り組みを掲載したことで、尾張旭市側から相談を受けた岐阜県社協を通じて八木山地区社協に問い合わせがあり実現したものです。

当日は、八木山地区社協の皆さんが活動拠点「ささえあいの家」でメンバー手作りのシフォンケーキとコーヒーで視察者をもてなしながら、多岐にわたる活動を紹介しました。

質疑応答では、有償ボランティアの仕組み、運営資金、活動者を増やすコツ、行政や市社協との連携等についてやり取りが行われたということです。

尾張旭市の皆さんからは「ここまで立派な活動はできないかもしれないけれど、やれることを見つけてやってみたい」「畑の活動はとてもいいですね」などの感想が聞かれたそうです。(編集部)



# 新しい ふれあい社会づくりに 向けて

ふれあい

いきがい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、  
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、  
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。

さらに、全国自治体が地域支援事業で取り組んでいる  
住民主体の助け合いの地域づくりも強力に支援しています。

どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

- **ご支援ありがとうございます。**

さわやかパートナー（賛助会員）・  
ご寄付者の皆様のご紹介

- **さわやか活動日記**（抄）



# ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

(敬称略) (2024年11月1日～11月30日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合がありますご了承ください。

## さわやかパートナー個人 (39件)

(都道府県別50音順)

北海道	平居 和佐子	山口 浩一郎
加藤 孟	前田 恭平	吉野 義道
岩手県	千葉県	神奈川県
大久保 孝信	勝又 烈	川口 浩平
大和田 剛史	佐野 敏子	洲崎 一雄
島川 敏文	田中 達夫	山中 一彦
戸田 公明	西原 清隆	新潟県
宮城県	橋本 邦義	久保田 美知子
小松 沙織	東京都	富山県
茨城県	岡本 隆夫	岡崎 格
古山 均	川上 五郎	長野県
野崎 照子	熊谷 展一	中下 秀子
埼玉県	坂本 大輔	滋賀県
大藤 玲子	森 恒俊	坂井 元嗣

## 大阪府

高橋 愛子

中村 益久

播村 昭子

吉田 薫

## 兵庫県

徳永 愛子

奈良県

橋本 昌子

和歌山県

## 前智博

高知県

野口 喜久子

宮崎県

青木 淳一

## さわやかパートナー法人 (6件)

(50音順)

- 株式会社三省社印刷所
- サントリーホールディングス株式会社
- 株式会社サンハート
- 株式会社セラビスト
- 新潟県労働金庫
- NPO法人寝屋川あいの会

## 一般ご寄付 (3件)

(50音順)

- 石福ジュエリーパーツ株式会社 (3万円)
- 一般財団法人年金住宅福祉協会 (300万円)
- 匿名希望 (2万円)



# さわやか活動日記(抄)

各地・各事業の取り組みをご紹介します



ふれあい推進事業

情報交換とSC同士のネットワークづくり

埼玉県北部ブロック・西部ブロックSC情報交換会

■埼玉県

〔11月7日〕埼玉県主催の北部ブロックSC情報交換会が開催され、県内北部自治体から計38名が参加した。県地域包括ケア課と、アドバイザーとして深谷市第一層SC荻原祐輔氏、埼玉県社会福祉協議会の林晴菜氏、当財団・岡野も参加し協力した。



この情報交換会は、市町村担当職員とSCが効果的な生活支援体制整備事業を実施していくため情報交換を行うとともに、ネットワーク形成を図ることを目的とし、県内を東西南北の4ブロックに分けて集合形式で実施している。また、講義等は行わずグループワー

地域支援事業の活動報告は、このほかに当財団ホームページにもアップしています。ぜひご覧ください。

SC生活支援コーディネーター

クを中心に「上半期の振り返りと情報交換」をテーマとし、前半は職種混合のちょっとしたグループ、後半は職種別のグループで情報交換が行われた。アドバイザーも各グループに入った。

題への支援の難しさ、協議体の周知不足、常設のサロンの必要性などが挙げられていた。

前半のグループワークでは、これまでの各地域の取り組みと課題について情報交換。当財団が入ったグループでは課題として、交通手段の不足が共通の課題として挙げられた。ほかに、集いの場の不足、住民の高齢化、若年層の活動への不参加、地域ごとに異なる課

発表後のコメントでは、林氏から「移動の課題では、協議体がデマンドバス等の既存制度に対する課題をまとめた事例もある」と話し、岡野からは「既存の担い手やボランティア養成講座修了者など、興味関心がある人にもあらためて目を向け、丁寧働きかけることで、活動への参加につながった事例もある」などとコメントした。



埼玉県北部ブロックSC情報交換会の様子

後半のグループワークでも前半と同様に、これまでの各地域の取り組みと課題について情報交換が行われた。課題としてはやはり、交通手段の確保が重要課題として議論された。ほかに、移動スーパリーの運営面、地域ごとの活動への温度差などが挙げられていた。

発表後に最後のまとめとして、萩原氏から「移動の課題には、既存の公共交通機関の改善点を伝えることも大切。また、SCとして資源創出だけにとらわれず、既存の活動の多様な効果にも目を向けてはどうか」、林氏から「移動支援は、住民の事故等への不安解消のため保険等の情報を丁寧に説明することも大切」、岡

野からは「住民アンケートはニーズの洗い出しだけでなく活動周知にもつながる。さまざまな人や組織とつながることを意識し、ネットワークで課題を解決することが大切」とコメントした。

今回の情報交換会はグループワークの時間を十分に取り、前半と後半でメンバーを入れ替えることによって、幅広い情報収集と課題の深掘りの両方ができ、参加者の満足度も高いように感じられた。県主催の情報交換会は、市町村を超えたSC同士のネットワークが形成され、SCの孤立化を防いで互いに相談できる関係づくりにもつながっており、県による後方支援の好事例だと感じている。

**〔11月28日〕**埼玉県主催の西部ブロックSC情報交換会が開催され、県内西部自治体から計45名が参加した。7日の北部ブロックと同じ趣旨で行われ、アドバイザーは、同県三芳町社協所属の第1層SC関口和宏氏、川島町第1層SC山田一志氏、飯能市第1層SC梅木裕也氏、県社協の林氏、当財団・岡野。

グループワーク1では、「地域紹介」として各地域の特徴や協議体の設置状況、地域活動の現状について情報共有した。関口氏は「今回得た情報やヒントを、自分たちの地域で同じ悩みを持つ人々と共有しながら進めていくことが大切」、梅木氏は「多様な活動が創

出されていると感じる。S  
C 同士が継続的に連絡を取  
りながら情報共有を進めて  
いけるとよい」とコメント  
した。

グループワーク2では、  
「上半期の振り返りと情報  
交換」として、これまでの  
地域活動の具体的な取り組  
みとその課題について共有  
した。知らない地域に入っ  
たことにより新たな目線で  
活動創出につなげることが  
できた、第2層から第1層  
に異動したことで地域同士  
の橋渡しや企業等へのアプ  
ローチなど圏域に縛られな  
い活動ができるようになって  
た、等が挙げられていた。  
山田氏は「SC 同士の顔の  
見える関係性や、情報交換  
は業務に生かされる」とコ

メントし、自身が継続的に  
参加しているSC 交流会を  
紹介した。岡野からは「住  
民の声を関係各課や各種会  
議等で広く共有していくこ  
とも課題解決には必要。新  
たな担い手の確保だけでな  
く現状の担い手が活動を維  
持できるような話し合う場を  
持つことも大切」と話し、  
若い人の目に届きやすい周  
知方法の検討等についても  
伝えた。

グループワーク3では、  
「下半期、来年度に向けて」  
として、地域活動の活性化  
策や新しい取り組みの可能  
性について意見交換した。

グループワーク3および  
全体のコメントとして、林  
氏は「住民の声を届けるこ  
とが大切」、関口氏は「負

担を感じない範囲で課題解  
決を一步ずつ進めていくよ  
う住民に働きかけよう」、  
梅木氏は「SC 同士の良好  
な関係づくりが大切」、山  
田氏は「ケアマネジャーと  
の情報交換や、協議体情報  
交換会を工夫しながら進め  
ていく予定」と述べた。岡  
野からは「これまで地域活  
動と接点のない人や組織へ  
のアプローチも並行して進  
め、より広いつながりをつ  
くり、ネットワークで課題  
解決していく支援をしよ  
う」と話した。

\* \* \*

SC 同士が時間を取って  
日常的に情報交換を行うの  
は難しい。対面での情報交  
換会は、活動のヒントを得  
られるだけでなく、SC 同

士のつながりがづくりの大き  
なきっかけとなっている。  
アンケートでも、情報交換  
会への満足度はおおむね高  
い。市町村を超えた圏域で  
の情報交換会は市町村主催  
での開催は難しく、県が主  
催することで可能となる。  
SC 同士が継続的に情報共  
有や相互に学び合う関係づ  
くりがSC のスキルを高め、  
ひいては今後の地域活動の  
発展につながると感じる。  
今後も継続的な情報交換会  
開催による県の後方支援を  
期待したい。(岡野 貴代)



## 市民フォーラム開催

### 協議体有志が実行委員務める

■ 昭和町（山梨県）

〔11月16日〕2020年から生活支援体制整備事業に取り組み、22年から市民の啓発などに向けてフォーラムを開催している昭和町。当財団は20年に講師として支援し、その後の勉強会で第2層協議体づくりに関わった。この日は、今年度のフォーラムが開催され、財団もアドバイザーとして協力した。

今年度は第2層協議体メンバーから有志がフォーラム実行委員会となり開催。目的は、助け合いの地域づくりへの理解と参加を広げたい、第2層協議体のメン

バーを増やしたい、第2層協議体へのエール。実行委員会とS・C、行政担当者など関係者はおそろいのTシャツを着て設営・準備、受付、司会、ワークシヨップのファシリテーターなど運営を担った。

塩澤浩市長のあいさつの後、第1層S・Cの金丸由希氏と行政担当の増田優子氏が、制度説明とこれまでの協議体の取り組み・課題について説明した。財団の講演は参加型で行おうと実行委員会が企画。グループワークも交えながら助け合いの必要性を実感してもらい、

助け合いの理解を広げることで、協議体への参加を呼びかけることにした。講演タートルは「身近に支え合いの輪を広げよう」とし、まず「身近に相談できる人はいますか」とたずねながら、「誰でも困ることがあり、誰でもできることがある」という活動の必要性と、自分を生かして参加できる助け合いについて伝えた。

「助けてと言えますか」と問いながら「助け合い体験ゲーム」を行うと、いつも通り次第に本音も出され参加者同士の距離が近くなり、和気あいあいとした雰囲気となった。その後、身近に感じそうなさまざまな助け合いの事例を紹介した。次に金丸氏が進行してワ

ークシヨップを実施。講演を通じての気づきや感想などを出し合い、いくつかのグループの発表を全体で共有した。「行政サービスだけでなく、身近な支え合いがたくさんあることがよく分かった」という意見も出た。発表を受けて財団からは、「誰もが持っている『役に立ちたい』という気持ちを生かせるように、助け合いを広げていこう」とコメントした。さらに町長から「本当の意味で住みやすいのは、支え合いのあるまち。支え合いに失敗はない。取り組んでいきましょう」と熱いエールが送られ、会場がさらに盛り上がった。

終了後アンケートには「協議体に参加したい」と

記名した人が10名。「今回のような参加型のフォーラムはとてよよかった」「ワークシヨップが少人数で話しやすく、雰囲気がとてもよく楽しかった」との声が寄せられた。「12月以降も

引き続き参加していただけるよう、各協議体リーダーとよく作戦を練って臨みたい」と金丸氏。新メンバーを加えて、さらに支え合いを広げる取り組みが進んでいくだろう。(鶴山 芳子)

## SC現地研修2回目を開催 居場所立ち上げのプロセスなど学ぶ

### ■岩手県

【11月25日】岩手県主催のSC現地研修2回目が同県滝沢市で開催された。9月の1回目同様、SCらが実施した担い手養成研修会から立ち上がった居場所「ほっこりの会」が視察対象で、県内15市町村から35名が参加。当財団は2021年の担い手養成研修会やその後

の支援に関わったことから、県のアドバイザーとして参加協力した。

研修の趣旨と流れ、「ほっこりの会」の説明、参加者の意見交換の後、場所を移動して居場所を視察。その後、再度意見交換を行った。

参加者からは「交流に消

極的な男性をどう巻き込むか」「参加者の固定化への対策は」「若い世代の参加につなげるには」等たくさん質問や感想が出され、居場所代表者、滝沢市のSCや行政から回答して理解を深めた。特に多かったのが担い手養成研修会について。「研修開催が目的にならないこと」と財団からアドバイスし、ポイントとして、住民に分かりやすいチラシを作成すること、周知方法、ワークシヨップを取り入れること、助け合い実践者に話してもらうことなどを伝えた。

終了後アンケートには、「住民主体になるような後方支援が行われている様子が分かった。手作りのチラ



岩手県のSC現地研修。熱心に意見交換が行われた

シや連続で同じことをしないなどが参考になった」「講義形式より、現場を見ることが得るものが大きかった」「住民やスタッフの

皆さんが若々しく元気で、内容も固定せずやりたいことをやっていける姿を見て、縛られないゆるい場のほうが気軽に来られるのだと思っただ」 「担い手養成研修会

## 来年度の体制充実を目的に 生活支援体制整備部会

■新発田市（新潟県）

【11月27日】新発田市は新潟県のアドバイザー派遣事業を活用し、来年度から充実した第2層協議体および第2層SCの制度設計をしたいと、今年度3回の支援を受けて関係者の理解を推進してきた。今回は、協議体とSCの役割について先進事例を基にしたイメージの共有・体制構築と、第1

に参加してほしい方を具体的に記載されているのは分かりやすく素晴らしいアイデア」等の感想が寄せられた。（鶴山 芳子）

層協議体の役割を関係者間で協議することを目的に、第1層協議体との意見交換・合意形成を行う場として生活支援体制整備部会が行われた。参加者は第1層協議体メンバーや行政等17名、当財団もアドバイザーとして協力した。

行政の開会あいさつ、部会長・副部会長の選出に続

た。

次に財団より「これからの支え合いの地域づくりについて ―SCと協議体の役割―」と題して講義。第1層協議体は半数ほどが入れ替わるため常に基本を押さえること、また、来年度から第2層協議体の体制づくりを活発化していくにあたり、第1層と第2層それぞれの役割と両者が連携した取り組みの事例、さらに地域団体（自治会、老人クラブ等）との関係性として、SCの多様化・複雑化から、地域団体と協議体は共存し連携するものであることなどを、山梨県南アルプス市等の事例を通じて具体的に伝えた。

グループワークのテーマ

き、行政から部会の概要説明。地域ケア会議でのニーズを踏まえ、「つながりがある・身近に頼れる人がいる」「住民同士の助け合いがある」ということから、目指す姿は「一人も取り残さない地域をつくること」と示した。実現に向けては、地域への入り方、どんな人にアプローチするのか、すでにある取り組みとの役割分担を問題提起した。また、これまでの取り組みとして、高齢者大学と連携した「おたがいさま講座」の開催、第2層協議体（同市赤谷地区、川東地区）の取り組みなどを紹介。来年度17地区での取り組みを進めるために第2層SCを配置する予定であることなどを共有し

は「第1層協議体の役割と取り組みについて」。2グループに分かれ、①第2層に協力できそうなこと、②第1層協議体として新たに必要と思われる取り組み、についてたくさんさんの意見が出され、発表が行われた。財団と県はまとめてコメントした。

終了後の振り返りでは、共通理解が進んだこと、積極的に具体的な意見が出たことを共有。来年度に向けて何から取り組んでいくか整理していこう、と話し合った。  
(鶴山 芳子)



## 社会参加推進事業

### 5年ぶりの開催で大盛況 さわやか スポーツ広場

【11月16日】東京都武蔵野市の特別養護老人ホーム「とらいふ武蔵野」で、「さわやかスポーツ広場」が5年ぶりに開催された。

この企画は1997年、高齢者・スポーツ選手・子どもとの3者交流を通じて財団とその活動を広く知ってもらおうと、当時ボランティア職員だった吉田旭雄氏の発案により実現したものの。同年9月、公益社団法人日本プロサッカーリーグ（Jリーグ）様のご理解・ご協力の下、浦和レッズ様の参加を得て、埼玉県春日



「とらいふ武蔵野」でのさわやかスポーツ広場。  
高齢者と小学生が握手

部市の彩光苑で初めて開催された。その後も、吉田氏

から企画を引き継いだボランティア職員長の長澤義彦氏の尽力で、バスケットボール、卓球、バレーボール、柔道、剣道、新体操にまで裾野が広がり、サッカーではJリーグのチームを中心に約120回開催されてき

た。

今回は、これまで10回以上協力をいただいている全国有数の強豪社会人チーム、横河電機バスケットボール部WILD BLUEから選手・スタッフ計20名、同じく長年にわたり協力をお願いしている世田谷区内の小学生ミニバスケットチー

ム、給田シューティングスタ  
ーズから選手・スタッフ  
・保護者合わせて約30名、  
そして、とらいふ武蔵野利  
用者28名が参加した。子ど  
もたちがバスケットボール  
を使って披露した「ドリブ  
ルダンス」は、ユーチュー  
ブを見た女子選手の創作と  
のことだったが、この日の  
ためにかなり練習してきた  
様子がうかがえ、素晴らし  
いものだった。

高齢者と握手する場面で  
は、照れ臭いのかうつむい  
てしまう子、相手の顔をし  
っかりと見て笑顔で言葉を  
交わす子など、さまざまに  
微笑ましかった。

コロナ禍での休止を経て、  
5年ぶりの開催で大いに盛  
り上がったさわやかスポー

ツ広場。特に、高齢者が  
「久しぶりに若い人たちと  
交流でき、本当に楽しく、  
元気をいただきました。来  
年またお会いしたいです」  
と弾ける笑顔で語っていた  
のが印象的だった。

(蒲田 尚史)

### JA助け合い活動 全国交流集会以 清水理事長が講演

〔11月29日〕一般社団法人  
全国農業協同組合中央会  
(JA全中)の「令和6年  
度JA助け合い活動全国交  
流集会」が開催され、全国  
から59名(オンライン55名  
会場4名)が参加した。

JA改革・組織基盤対策  
部長の加藤純氏による開会

あいさつと、暮らし・高齢  
者対策課長の奈良千尋氏に  
よる情勢報告「JA助け合  
い活動にかかる情勢につい  
て」の後、当財団の清水肇  
子理事長が「なぜ今、助け  
合いが必要か 助け合いで  
いきいき 地域の出番!」

と題して講演した。市町村  
全域に助け合いを広げる仕  
組みや生活支援コーディネ  
ーター・協議体の取り組み  
について説明。具体例とし  
て、新潟県新発田市の「川  
東いきいき大作戦」、島根  
県出雲市の「NPO法人た  
すけあい平田」、山形県天  
童市の「NPO法人ふれあ  
い児童」の活動を紹介した。  
つながりから共感を育み、  
自然な互助を生み出す場と  
しての居場所、また、当財

団の「地域助け合い基金」  
についても説明を行った。  
後半には、JAなす(栃  
木県)、JA高岡(富山県)、  
JAたがわ(福岡県)の助  
け合い組織の素晴らしい取  
り組みが報告された。

(蒲田 尚史)



### 情報・調査事業

### かながわ コミュニケーションレτζ 運営委員会に出席

〔11月26日〕第2回かなが  
わコミュニケーションレτζ運  
営委員会が開催され、委員  
として出席。伊藤真木子座  
長(青山学院大学コミュニ  
ティ人間科学部教授)の下  
で議論した。議題は、(1)令  
和6年度かながわコミュニ

ティカレッジ運営業務の中間報告について、(2)令和7年度かながわコミュニティカレッジ運営業務委託仕様書について、(3)令和7年度かながわコミュニティカレッジ運営業務委託団体募集案内・審査基準及び配点について。

(1)では運営業務委託団体から中間報告が行われ、約30の講座はそれぞれ順調に進んでいることを共有し、いくつかの質疑応答で状況を確認した。(2)の仕様書案は、第1回運営委員会での意見を反映し作成されている。その方向性の中で、神奈川県の方策(総合計画等)を踏まえつつ、少子高齢化や人口減少の進展など社会情勢の変化への対応が期待

されるタイムリーな講座を例示する、という工夫を共有し議論した。

コミュニティカレッジは、メインテーマを「地域での助け合いが広がる社会づくりを目指して」としており、

### 「広がれボランティアの輪」連絡会議 毎年恒例の関係省庁との懇談会 新たな省庁の参加も得て開催

〔11月27日〕当財団も勉強会プロジェクトメンバーとして企画・運営に関わる「広がれボランティアの輪」連絡会議主催の「ボランティア・市民活動の推進に関する関係省庁との懇談会」。例年8月に開催しているが、今年には秋に30周年記念の全国フォーラムを開催した関

その実態に沿った表現などを提案した。より良いコミュニティカレッジになってほしいという委員の熱い思いを、県担当者と共に議論し合う機会となった。

(鶴山 芳子)



係でこの日に行われ、会場とオンライン合わせて90名以上の参加があった。今回は各省庁の施策をお聞きした後、ネット上で参加者が意見を寄せられる双方向の会議システム「Slideo」を用いて参加者が質問、また質問に共感する人は「いね」を付けるという初の

試みも行った。

午前は「持続可能な地域社会づくりに向けたボランティア・市民活動への期待」と題し、同連絡会議幹事の永田祐氏(同志社大学社会学部教授)の進行で、厚生労働省社会・援護局、内閣府孤独・孤立対策推進室、文部科学省総合教育政策局デジタル庁国民向けサービスグループの各担当者から、少子高齢化・人口減少社会においてつながるためにどう地域を巻き込むか。足を運びやすいリアルな居場所づくりとデジタル上の居場所づくりの必要性等の施策が紹介された。

午後は「災害時におけるボランティア・市民活動との連携」をテーマに、同連

絡会議副会長の原田正樹氏（日本福祉大学学長）を進行役に、内閣府（防災担当）普及啓発・連携担当、こども家庭庁成育局、環境省環境再生・資源循環局、復興庁被災者支援・医療福祉班の各担当者から、能登半島地震での取り組み状況、東日本大震災においてボランティア・市民活動が果たした役割などが紹介された。会場から、公助と共助の連携、情報共有のあり方などについて質問も寄せられた。

最後に同連絡会議の上野谷加代子会長（大阪ボランティア・市民活動センター長）が、社会的課題の本質、接近方法を新しい技術もあわせて謙虚に学んでいくことが必要だ、と総括した。今回はデジタル庁、復興庁の施策も学ぶことができ、午前・午後の内容を通じて、キーワードになるのは「つながり」「居場所」だとあらためて確認した。

（上田 恵子）

## 事務所 だより

● 昨年も、予測できないようなことが社会全体でたくさん起きた。財団も、職員一人ひとりが当事者意識を持って世の中の変化に対応していかなくては…。定例会議の場でも、皆で情報と意見を交換し、来年度に向けて準備を始めているところ。今年も皆様のご支援にお応えできるよう頑張ります。

みんなで  
新しいふれあい社会を  
つくりませんか



公益財団法人



公益財団法人

さわやか福祉財団



『さあ、言おう』投稿募集

## あなたの意見を社会へ生かそう

『さあ、言おう』は皆様の声を社会につなげる  
問題提起型情報誌です。

### ぜひ皆様の声をお寄せください

『さあ、言おう』では、取り上げたテーマに対する読者の皆様からのご意見・ご感想、あるいは普段気になっているテーマに基づいた体験談や提言などを随時募集しています。

#### 常設テーマ

- 地域の助け合い活動について
- 助け合いの地域づくりについて
- いきがい、社会参加について
- 居場所や地縁組織、NPOの活動について
- 新地域支援事業について
- 生き方について など

#### 投稿の方法

- 字数や回数制限はありませんが、掲載にあたっては誌面の都合上、編集要約する場合があります。あらかじめご了承ください。
- 一般投稿は形式は問いません。本誌添付の投稿ハガキなどもご自由にご利用ください（原稿はお返しできません）。
- 投稿は、事情が許す限り本名でお願いします。  
ただし、掲載時には匿名、あるいはペンネームの使用も可能ですので、その旨お書き添えください。
- 投稿時には、お名前ほかに、ご住所、連絡先お電話番号をご記入ください（内容により質問させていただく場合があります）。性別、年齢もよろしければお書き添えください。大変参考になります。

#### 送付先

〒105-0011  
東京都港区芝公園2-6-8  
日本女子会館7階  
公益財団法人さわやか福祉財団  
『さあ、言おう』編集部宛  
FAX (03) 5470-7755  
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp



『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人  
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人  
年会費  
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の優遇措置が受けられます。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の優遇措置が受けられます(さわやか福祉財団は所得税の税額控除対象の公益法人です)。

一般ご寄付を  
いただく場合の  
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三井住友銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号2754574

みずほ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3383326

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※払込手数料不要の郵便払込取扱票をご用意していますので、お申し出いただければ郵送いたします。ただし、窓口にて現金(硬貨)でお振り込みいただく場合は、ゆうちょ銀行所定の取扱料金がかかる場合がございます。

\*お問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。  
電話 (03) 5470-7751 メール mail@sawayakazaidan.or.jp

表紙絵に はり絵・池田げんえい

「  
初春  
」



編集後記 ●本年も『さあ、言おう』をよろしく願い申し上げます。●「活動の現場から」は和歌山県橋本市。霊峰・高野山にほど近い地域の住民たちが、喜びを感じながら活動しています(P4~)。●訪れる人は誰でも「村の衆」。山梨の小さな異世代交流を取材しました(P10~「子どもと一緒に地域で輝こう」)。●本誌の掲載を機に現場視察が実現しました(P22「現場視察レポート」)。●「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2024」のオープニングフォーラムが、財団ホームページからどなたでもご覧いただけます(裏表紙)。

助け合いを  
広げよう!



清水 肇子

どれほどの巨星であろうとも

必ず寿命がある

しかし命を全うしてなお、何千年も何万年にもわたり

私たちに光を届けてくれている

暗闇に迷う不安に寄り添い、力づけるように

やさしく、時に強く、輝き続ける

思うところがあれば、その存在は消えることはない

遺した光で行く道を照らし続けてくれるに違いない

さあ、行こう

さあ、共に進もう



●公益財団法人さわやか福祉財団理事長

ボランティア・ベンダー協会の理事長をボランティアでやっています。マークのある自動販売機で飲料を購入するだけで1本につき3円が寄付金となり、福祉・環境・国際貢献等の活動団体に贈られます。ぜひ一緒に広めていきませんか。

## さわやか 1月号

通巻377号 2025年1月10日発行  
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい

取材協力 七七舎

イラスト すずきひさこ

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子

発行元 公益財団法人さわやか福祉財団

〒105-0011

東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階

Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755

E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp

<https://www.sawayakazaidan.or.jp>

Printed in Japan

すべての人が幸せに暮らせる社会へ



# いきがい・助け合い オンラインフェスタ2024

目指せ 地域共生社会

\\ ぐちゃませにつなごう! //

## オンラインフェスタ2024の動画を 公開しています

昨年10月開催の「いきがい・助け合いオンラインフェスタ2024」で大変好評をいただいたオープニングフォーラム「地域共生社会をみんなでつくるための提言」の動画を、当財団ホームページで公開しています。フェスタ参加者以外の方でも視聴できます。ぜひご覧ください！

【財団HPオンラインフェスタページURL】

<https://festa.sawayakazaidan.or.jp>

財団HPトップページ上にある  
「オンラインフェスタ」専用ページのバナーからも  
ご覧いただけます

